

Aldous Huxley 著

「昼食の時、聞いた⁽¹⁾修道女の話」(翻訳)

桑 原 加 代 子

「最後にあなたに会って以来、私が何をしていたかですって？」と、ミス・ペニーは、大きな力のこもった声で私の質問を繰り返した。「で、最後にお会いしたのは、いつでしたかしら？」

「確か六月だったと思うけど」と、私は計算しながら答えた。

「じゃ、ロシア人将校にプロポーズされた後ね？」

「ああ、そのロシア人将校の話なら聞いた覚えがあるよ。」

ミス・ペニーは、頭を後にひいて笑った。長いイヤリングが、カラカラ音をたてて揺れた——イヤリングには人間の体がぶらさがっている。彼女の微笑^{ほほえみ}は大袈裟だが、感じはよかった。そして、その笑い声は前にも言ったようによく響いた。

「とてもおもしろい事件だったのよ。もっとも聞く方にはつまらないでしょうけどね。あの将校の話、私大好きよ。彼、私に『君の目を見ていると気が狂いそうになる』って言ったのよ。」彼女はもう一度声をあげて大笑いした。

君の目——彼女はうさぎのような目をしていた。頭脳と同じくらい明るく、無表情だがキラキラ輝いていた。恐ろしい女性^{ひと}だなと思い、そのロシア人将校に同情した。

「『情も思いやりもなし』と、彼女は悪魔の言葉を引用しながら続けた。『恐れる事も非難される事もなし』という言葉と同じくらいすてきな言葉だと思わない？ でもちょっと考えさせて。あれ以来、私何をしていたのかしら？」考えこみながら、彼女は大きく鋭い真白い歯でパンをかみ切った。

「ミックス・グリル⁽²⁾を二人前」と、私はついでといった感じでウェイターに注文した。

「でも、もちろん」と、ミス・ペニーは突然叫んだ。「ドイツ旅行以来、あなたにはお会いしていなかったわね。色々な冒険談もしていないし、盲腸や修道女の話も。」

「修道女だって？」

「すばらしい修道女よ。彼女の話をしなれば。」

「是非。」ミス・ペニーの話はいつもおもしろかった。私は二人のこの昼食がとても楽しいものになりそうだと胸を踊らせた。

「この秋、私がドイツに行った事は御存知でしょう？」

「いや、実を言うと知らないんだよ。でも——」

「あちこち回っていたのよ。」と、ミス・ペニーはいやに派手な宝石をつけた手をくるくる回し、円を描いてみせた。彼女はいつも大きくてどうも本物とは思えないような宝石をキラキラさせていた。「一週間三ポンドで生活しながら、あちこち回っていたのよ。取材も兼ねてたの。自由新聞用には、『敗者とはどんな気持ちか』⁽³⁾というお涙頂戴の記事を、他の新聞用には、『ドイツ人はいかにして賠償金から逸れるか』⁽⁴⁾といった記事よ。最高にすばらしい仕事をしなければね。でも、仕事の話はよしませう。そう、あちこち回ってとてもおもしろいものを見つけたのよ。ベルリン、ドレスデン、ライプチヒ。それからミュンヘンやあちこち。ある日グランバークへ行っただの。御存知でしょう？そこは絵本に出てくるような町なのよ。丘にはお城があって、つりビヤガーデン⁽⁵⁾、ゴシック式の教会、古い大学、川、可愛らしい橋、そしてあちこちに森があるの。すてきなよ。でもその美しさを十分楽しむ時間がなかったの。そこに着いた翌日、ダウンしたの。盲腸になったのよ。」

「それはひどい！」

「病院に連れて行かれ、あっという間に手術されたの。優秀な外科医と有能なシスター⁽⁶⁾が看護してくれたの——あんなに手厚い看護始めてだったわ。でも、四週間も寝ているというのは、退屈なものよ——とても退屈だったわ。でも、物事には埋め合わせってあるのね。例えばあの修道女がそうだわ。ああ、有難い、料理が来たわ！」

注文したミックス・グリルは、おいしかった。ミス・ペニーの話から、私はその修道女のことを断片的に知ることができた。気高い頭巾を付けた丸く、血色のよい可愛らしい顔、青い目、整った目鼻だち、完璧な歯——いや実際は義歯だ。しかし全体的印象はとてもすばらしい。二十八歳の若いドイツ娘だ。

「彼女は、私を看護してはいなかったのよ。」と、ミス・ペニーは説明した。「でも、あるイギリス人を看にやって来た時など、よく彼女を見かけたわ。シスター・アガサという名前だったわ。戦争中、何人もの負傷兵たちをキリスト教に改宗させたという話よ——彼女の美しさを考えれば別に驚く事ではないけれどね。」

「彼女は、君にも改宗を勧めたのかい？」と、私は尋ねた。

「それ程、愚かじゃないわよ。」ミス・ペニーは笑った。するとイヤリングがカラカラと音をたてて鳴った。

私は、ちょっとの間ミス・ペニーの話の目的を楽しんだ——ミス・ペニーは、教父たち⁽⁷⁾の巨大な組織に立ち向い、三位一体説に対してはイヤリングをカラカラ鳴らし、無原罪懐胎説⁽⁸⁾をあざ笑い、宗教裁判所長の陰しい顔つきには、そのキラキラ輝く無表情なうさぎのような目で対抗しているのだ。女性の恐さの秘密とは一体何だろうか。

しかし、私はその話を理解しかねていた。何が起きたのか？ ああ、そうだ、要するにシスター・アガサは、二三日欠勤した後のある朝、修道女の格好ではなく剃髪した頭に頭巾の代りにハンカチを付け病院の掃除婦用の仕事着で現れたのであった。

「死んだのよ」と、ミス・ペニーは言った。「彼女は死んだように見えたのよ。まさに歩く屍といった感じだったわ。ぎょっとする様な姿だったのよ。あれ程短い間に、あんな風になるなんて考えられなかったわ。まるで何か月も病気だったみたいに苦しそうに歩いていたし、目の回りにはひどい隈ができていて、顔には深いしわがあったのよ。まさしく不幸の表情だったわ——ぞっとする程だったのよ。」

彼女は、テーブルとテーブルの間に身を乗り出して通りすがりのウェイターのすそをつかんだ。その小柄なイタリア人ウェイターはぎょっとした様な驚きの表情を顔にあらわして向きむいた。

「ギネスビールを半パイント持って来て頂戴。」と、ミス・ペニーは注文した。「それから、その後でジャムロールを少しね。」

「あいにく今日はジャムロールは、ございません。」

「あら、まあ！」と、ミス・ペニーは言った。「じゃ、何でもいいわ。」

彼女はウェイターのすそを放し話を続けた。

「どこまで話したかしら？ そうそう思い出したわ。彼女は、水とブラシの入ったバケツを持って掃除婦の格好をして私の病室に入って来たの。もちろん私は、びっくりしたわ。『アガサ、一体どうしたの？』と私は尋ねたの。答えはなかったわ。頭を振って床をゴシゴシふき始め、ふき終ると私の方は見向きもしないで部屋を出ていったの。私の付き添いの看護婦が来た時、私、『アガサに何があったの』って聞いてみたの。『言えない。言いたくないのね』と私は言ってみたの。返事はなかったわ。約一週間たって何が起きたのか、やっと分かったの。誰も教えてくれなかったんですもの。昔のような厳格な禁止令が出ていたのよ。でも結局私、さぐり出したのよ。看護婦、医者、掃除婦たちから、少しずつ聞き出したの。私はね、いつでも欲しいものは結局手に入れるのよ。」と、ミス・ペニーは馬のように大笑いした。

「その通りだね」と、私は愛想よく言った。

「どうも有難とう」、ミス・ペニーは礼を言った。「先を続けるわ。あちこちのうわさ話から情報を集めたのよ。『シスター・アガサは男と逃げたんですって。』——あらまあ！——『患者の一人ですってよ』——そうじゃないわ。——『刑務所から出てきた犯罪者ですって』——話がややこしくなってきたわ。——『その男は彼女を捨てたのよ。』——単純になってるみたい。——『彼女はここに連れ戻されて恥かしめを受けたのよ。礼拝室で彼女の葬式が行われたの——棺や他の全てのものも用意されてね。彼女は自分の葬式に出るよう言われたのよ。彼女はもう修道女ではないの。今は病院で一番つらい掃除婦として働いているわ。』

彼女は誰とも話すことを許されていないし、誰も彼女と話すことを許されていないの。彼女は、死んだ人間とみなされているのよ。』ミス・ペニーは、ちょっと言葉をきって、例の疲れた様子をしているイタリア人に合図した。「ギネスビールを持ってきて頂戴。」と、彼女は大声で叫んだ。

「はい、ただいまお持ち致します。」の声に続いて料理運搬用のリフトの方から別のイタリア人ウェイターが「ギネスを」と答え、さらに下の方から「ギネス一つ」と繰り返している。

「少しづつ分かってきたのよ。まず第一に、一人の男がいたの。彼の人相を頭に描く必要があったわ。結構むづかしかったのよ。だって彼に会ったことがなかったんですもの。でも彼の写真を手に入れたのよ。彼が逃げ出した時、警察が写真を配ったの。警察は彼を捕えることはできなかったと、私は思うけど。」ミス・ペニーはバックを開けた。「ほら」と、彼女は言った。「いつも持ち歩いているの。お守りみたいなものよ。もう何年もひもでヒースの木につないで持っていたのよ。きれいでしょう？ ルネッサンス風の顔だと思わない？ イタリア人との混血なのよ、彼は。」

イタリア人の血が入っているのか。それで分かった。大きな黒い眼、繊細な鼻とあご、堂々として官能的な曲線を描いている唇をした、こんなほっそりとした顔の人間を、バイエルン地方の血が生み出すことがあるのだろうか、私はずっと不思議に思っていたのである。

「とても、すばらしいね」と、私は写真を戻しながら言った。

ミス・ペニーは、大事そうにバックにしまった。「そう？」と、彼女は言った。「かなりいいわよ。でも性格や頭はもっとよかったのよ。彼って、善悪というものが分からない無邪気で子供っぽい悪漢だと、私は思っているの。それに才能を持っていたの——自然を管理し、支配し、開発するというイタリア人独得の才能よ。ローマの水路建設者の息子で、兄は電気技師だったの。ただクーノウは——彼の名前よ——水より女との方がうまいってのよ。彼は情熱のエネルギーを利用する方法を知っていたのよ。彼は情熱という水車を動かすことに熱中したの。恋を金もうけに利用したのよ。彼の特技よ。私、時々考えるんだけど、」と、ミス・ペニーは声の調子を変えてつけ加えた。「私が、もう少し年をとって独身だとしたら、若い恋の達人に利用されることがあるかしら。私の方から利用することは、ほとんどないでしょうから、屈辱的でしょうね。」

彼女は眉をひそめて一瞬沈黙した。絶対に有り得ない。ミス・ペニーは、美しくなかったしお世辞にも魅力的とは言えないのである。あのスコットランド人特有の濃いほだの色、うさぎのような目、声、ものすごい笑い声、体の大きさ、そして女性一般の恐ろしさ、そんなものを考えると絶対に有り得ない。絶対にだ。

「君は、彼が刑務所にいたと言ったね」と、私は言った。彼女の沈黙は、何か含みがあ

りそうで困ったなという感じだった。

ミス・ペニーは溜息をつき、目をあげうなずいた。「彼は、女性を利用する確実な道をとらないで危険な押し込み強盗の道を選んだのよ。私たちは皆、時には度の越した愚かな事をするものね。彼は重い判決を言い渡されたの。でも刑務所に入って一週間後だと思うけど、肺炎になったのよ。病院に移され、そこであの優しいシスター・アガサが特別付添人になったの。でも、改宗をしたのはむしろ彼の方だったと、私は思っているわ。」

ミス・ペニーは、ウェイターがジャムロールの代りに持ってきたジンジャー・ブディングの最後の一口を食べ終った。

「煙草は、やらないんだろう？」と、私はシガレットケースを開けながら言った。

「いえ、実を言うと、吸うのよ」と、ミス・ペニーは答えた。彼女は、レストランの中を抜け目なくぐると見回した。「今日、ここにあの嫌なゴシップメーカーがいないかどうか、確かめておかななくてはね。『著名な女流ジャーナリスト、ペニー嬢は、昼食後はいつも煙草を吸っている。昨日、カルメル通りから数百メートルも離れていないレストランで、彼女が煙草をプカプカ吸っているのを、私は見た』なんていう記事が明日の朝刊のコラムに出るといやすからね。あなたには、それがどんな筆使いになるかおわかりでしょう。でも有難い、邪魔者はいないわ。」

彼女は、シガレットケースから一本抜き取り、私の差し出したマッチで火をつけ、話を続けた。

「そう、改宗をしたのは若いクーノウの方だったのよ。シスター・アガサは還俗して修道女になる前のメルポメネ・フッガーになってしまったのよ。」

「メルポメネ・フッガーだって？」

「彼女の名前よ。私、医者から彼女の身の上話を聞いたのよ。その医者というのは、グランバークの数代に渡る人々の生死を見てきた人なの。彼が幼いメルペルをとりあげたのよ。彼女の父親は立派で著名な地質学者のフッガー教授よ。名前くらい、もちろん知っているわ。とても有名ですもの……キツネザルが発生したレムリア⁽⁹⁾という仮想大陸の研究をした人よ。私、かなり尊敬しているわ。世界市民のヘルダー博士⁽¹⁰⁾のお弟子さんで自由な考えの持ち主だったのよ。新英派でもあったの。朝食にはいつもポリッジ⁽¹¹⁾を食べていたの——1914⁽¹²⁾年の8月までね。そして、あの暑い8月5日の朝、厳しい面持ちで目にいっぱい涙をためて、彼はポリッジを食べるのを止めたのよ。文化や文明を裏切るような国の食物を、どうして食べ続けることができるかしら？ のどにつまったでしょうね。それ以後、彼はゆで王子を食べてたはずよ。本当に立派な人だったと思うわ。そして娘のメルポメネもまた、すばらしい女の子だったのよ。小さい時は、豊かなおさげ髪をしていたのよ。母親は亡くなっていたの、だから父親の姉が厳しく家を取りしきっていたの。バーサというのが叔母さんの名前よ。メルポメネは、丸々とふとった可愛い娘になったの。十七歳の時、

とっても不快で忌ましい事が彼女の身に起きたのよ。例の医者にもはっきりした事は分らなかったわ。でも、彼はフッガー家の古くからの友人で広い学識と若い女性に対する異常趣味を持っていた当時のラテン語教授と何か関係があるとしても、別に驚きはしなかったのよ。」

ミス・ペニーは、煙草の灰をからになったグラスの中におとした。

「もし、私が短編小説を書くとしたら」と、彼女は考えこみながら言った。(かなり厄介だけど)「今の話から、安っぽい身の上話を作るわ。メルポメネのこの忌わしい事件直後の場面から始めるのよ。その場面が目浮かぶようだよ。かわいそうな幼いメルポメネは6月の夜グランバーク城の城壁に寄りかかっているの。そして三十フィート下の庭のくわの木の下へ泣きながら走っていくのよ。彼女はその日の午後起きた恐ろしい出来事を思い出して悩んでいるの。エンゲルマン教授、立派な赤いアッシリア風のひげをたくわえた父親の古い友人……恐ろしい、恐ろしすぎる！ でも前にも言った様に短編小説を書くのは本当に厄介だよ。そうでなければ、私がまぬげだから書けないのかもしれないわね。これはあなたにお譲りするわ。あなたなら、こういった事調べられるでしょう。」

「君は気前がいいね。」

「どういたしまして」と、ミス・ペニーは言った。「私の条件は、アメリカでの売り上げの十パーセントを手数料として頂くことだよ。多分アメリカでは販売されないでしょうけどね。かわいそうなメルポメネの身の上話は、上品な合衆国の人たち向きではないもの。でも、城壁にいるメルポメネを、この後あなたならどうするか聞かせて欲しいわ。」

「それは簡単だよ」と、私は言った。「僕は、ドイツの大学町や丘にある城の事をよく知っているんだよ。君と同じように、6月の夜ということにしよう。それもキラキラ輝く夜だよ。彼女の後には、急勾配の屋根とほろ付きの塔のある真黒な城のシルエットがある。下の町のつりビヤガーデンからは、学生たちの完璧な四部合唱の歌声が、闇夜を通して響いてくる。『赤いバラ』——こういった魂を揺さぶるような甘くせつない昔の歌を聞いて、彼女は一層泣き叫ぶ。彼女の涙は、まるで雨つぶのように下のくわの木の葉に落ちていく。どうだい、これで十分じゃないかい？」

「とってもいいわ」と、ミス・ペニーは言った。「でも、今の風景描写の中に性の問題とその恐怖をどうやって織り込むつもりなの？」

「そうだね。ちょっと待ってくれ。」私は、学生生活を終えた遠い異国での夏に思いをはせた。「そうだ。くわの木の下にたくさんのゆらゆら揺れるろうそくと、中国のカンテラを置こう。見えたり消えたりする、光と影、宝石のようにキラキラ輝く葉、男や女のゆれ動く顔や手足を、想像してみてくれ。彼らは、この風もない6月の夜、くわの木の下で踊ろうとやって来た町の学生や女の子たちなんだよ。そして輪になって歌に合わせて踊り始めるんだ。」

『僕らは弾く
バイオリンを、
僕らは弾く
バイオリンを。』

そして、リズムが変わって早くなる。

『そして、僕らはブームスタラを踊る、
ブームスタラを、ブームスタラを、
そして、僕らはブームスタラを踊る、
ブームスタラーラを。』

くわの木の下の乾いた芝生の上では、彼らのめまぐるしく、ぎこちない踊りが繰り広げられている。そして城壁からメルポメネは下を見降して、突然はっと気が付くんだ。性、性、この世は性でいっぱいだということに。男と女も、雄も雌も——いつも同じだ。あの恐ろしい午後の光の中での出来事は本当に忌む。僕ならこんな風にするね。どうだい、ミス・ペニー。」

「それも、とてもいいわ。でも医者との話をどこかに入れてもらいたいわ。私は、あの医者が、例の言いにくい問題を話す前に、のどを鳴らし咳払いをした事忘れられないのよ。『エー、エヘン、御存知かと思いますが、エー、宗教の問題は、しばしば、エヘン、性的原因と深く関わりがあるものでして。』私は、こう答えたのよ。ローマ・カトリック教徒の間では、この事が本当だと信じられているようですが、イギリス国教会では——私は、イギリス国教会の一員だけど——かなり違いますって。そうでしょうともと、医者は言ったわ。彼には長く医者として働いている間に、イギリス国教会の事を知る時間がなかったのよ。でも彼は、このグランバークでの患者の間では、神秘主義が性生活と関係があると断言したわ。メルポメネがその好例よ。あの恐ろしい午後以来、彼女はとても信心深くなったの。あのラテン語教授が、彼女の感情から正常な感情を奪ってしまったの。彼女は、父親の穏やかな不可知論に反抗したのよ。そして、ある夜こわいバーサ叔母さんの目を盗んで、そっと「聖テレサの⁽¹³⁾一生」、「聖フランシスの小さな花」、「キリストに倣⁽¹⁴⁾いて」や、恐ろしく魅力的な「殉教者の書」といった禁書を読んだのよ。バーサ叔母さんという人は、こういう本が目につくとすぐ取り上げていたのよ。彼女は、この種の本はマルセル・プレボー⁽¹⁵⁾の小説よりもっと有害だと考えていたのね。善良で根っからの主婦の性格は、こういった本を読めばすっかり損われていたかもしれないわね。だから、1911年の夏バーサ叔母さんが亡くなった時、メルポメネはむしろほっとしたのよ。彼女は絶対必要な人がいなく

なっても結構うまくやっていたという事にその時気付いたのよ。かわいそうなバーサ叔母さん！」

「メルポメネが、自分はかわいそうだが本当は内心ひそかに喜んでいるという事に気付いて、ひどく恥じているのだと自分自身に思いこませようとしている事は容易に想像がつくね。」

「その通りよ。」と、彼女は言った。「そして、この気持ちは一層はっきりしてきて叔母さんの死が彼女に好きなだけのめり込める新しい力を与えたの。良心の苛責、悔恨を感じて、罪の償いをするという考えになったのよ。殉教史にこっている者にとって、罪の償いとは苦行だったのよ。彼女は、夜寒い中、ほとんど何も食べず何時間もお祈りをしていたのよ。歯が、よくあることだけど、ずきずき痛んできた時だって——医者に言わせると始めからその傾向はあったらしいけど——歯医者に行こうともせず心いくまで自分の苦行をしみじみ味わい、苦行は神秘の力に気に入ってもらえるに違いないと勝ちほこった様に感じながら夜も寝ないで起きていたのよ。彼女はこんな事を二三年も続けて完全にだめになったの。とうとう、胃潰瘍になったの。退院するまで三か月かかったわ。そして今度はこの長い間の中で始めてというくらい元気になって、真新しい金と象牙でできた義歯をつけていたのよ。そして、精神的にもむしろいい方に変わっていたはずよ。彼女を看護していた修道女たちは、彼女の苦行がやり過ぎで正しい事をしたのではなく罪を犯していたのだと彼女に教えたのよ。彼女たちは、彼女に唯一の救いの道は教会の規律、既成宗教の規律、権威への服従にあると説いたのよ。そして、押しつけがましくはないが独断的な不可知論者の父親を悲しませずに、秘かにメルポメネはローマ・カトリック教徒になったの。二十三歳の時のことよ。わずか数か月後に戦争が始まって、フッガー教授は永久にポリッジをあきらめたのよ。そんな愛国的な姿勢も長くは続かなかったわ。1941年の秋、彼はインフルエンザにかかり、それが致命傷になったのよ。メルポメネは、この世で一人ぼっちになってしまったの。1915年の春には負傷兵たちの中で働く、新米で誠実な看護婦が、グランバーグに現われたという訳よ。ここで、物語の六年間の空白部分には星印を一行入れるか、ピリオドを打てばいいわ。そして次は、シスター・アガサと病み上がりのクローウとの会話の途中から始めればいいのよ。」と、ミス・ペニーは、人差し指で「ここ」と説明した。

「二人の話って何だい？」と私は尋ねた。

「あら、それは簡単よ。」と、ミス・ペニーは言った。「何でもいいのよ。例えばこんなのはどうかしら？ 熱はひいたばかりよ。まずその若者は数日間もう完全に意識があるのよ。彼は自分でも良くなって、いわば新しい世界に生まれ変わったと感じているのよ——思わず笑いが出てくるくらいキラキラ輝いて新しく楽しいそんな世界よ。彼は自分の回りを見回すのよ。天井のハエが彼にはとても滑稽にみえるの。ハエはどうやって逆さに歩いているんだろう。それに対してシスター・アガサは、ハエは足に吸盤をもっているのよと

言って、自分の博物学は論理的かしらと思うの。足に吸盤だって——はは！ 何ておもしろい考えなんだろう。足に吸盤——こりゃいい。病み上がりの患者が大喜びしているのは、おもしろくて痛ましくて、そして明らかに感動的だと言えるわ——それがましてや、自分の足で歩ける様になったらすぐに刑務所に送り返されることになっている若者が大喜びしているなら尚さらよ。はは！ 笑い続けなさい、かわいそうな男よ！ 運命の三女神が、がやがやしゃべっているのよ。」

ミス・ペニーは、自らも大笑いしてみせた。その笑い声を聞いて、まだテーブルに残っていた人々がびっくりした様に顔をあげた。

「あなたは、運命の神とその皮肉な笑いについて何か書けるわよ。とても印象的だし、一行毎にお金になるわよ。」

「君こそできるよ。」

「まあ！ じゃ私の話を進めるわね。何日かが過ぎて病み上りの最初の浮かれ騒ぎはさめていくの。若者は色々な事を思い出して、憂うつになってくるのよ。力がよみ返り同時に絶望が彼を襲うの。彼の心の中は嫌な明日からの事でいっぱいなの。宗教の慰みなどには耳を傾けようとししないのよ。シスター・アガサは心配して彼に宗教を分からせ、信じさせ慰めようと努力し続けるの。これはとても大切なことよ、この場合他のどんな事よりもはるかに大切なことなのよ。そして今、性的生活がわずかながら、そっと作用しているのが分かるでしょう。また運命の三女神の声が聞こえるわ。ところで、」と、ミス・ペニーは声の調子を変え、テーブルに自信ありげに寄りかかって言った。「何か言ってみてよ。あなた本当に、真面目に文学を信じているの？ 正直に言ってみて頂戴。」

「文学を信じているかだって？」

「私は、運命の皮肉や、運命の三女神のことや何かを考えていたのよ。」

「うん。」

「心理学と自己反省の作業よ。文の構成、よい話、生き生きとした描写、適切な言葉、言葉の魔術、印象的な比喩があるわ。」

私は、ミス・ペニーのチリンチリン鳴るイヤリングを鎖につながれた骸骨に喩えた事を思い出した。

「結局、そしてまず始めに——初めから終わりまで——私たちがいるわ。二人のプロの物書きが、この誘惑された修道女を全く同情もせず満足気に眺め、彼女の不幸をどうすれば金になるか、頭をひねっているのよ。冷静に考えてみると、おもしろいとは思わない？」

「非常におもしろいね」と、私は同意した。「しかし、君がそんな風に物事をみるのなら何でもおもしろいよ。」

「いいえ、」と、ミス・ペニーは言った。「私たちの商売ほどおもしろいものはないわ。でも、もし私が根本原理に基づいて始めれば、私の話に結末はつかないわよ。」

ミス・ペニーは話を続けた。私はまだ文学の事を考えていた。文学を信じているかだって？ 真面目に？ 幸い、その問題は無意味だった。話は漠然としてきた、しかし、例の若者はよくなっているようだ。二三日すると医者^は、もう刑務所に戻ってもいいと言った。いやその問題は無意味だ。これ以上考えずにおこう。私は注意を元に戻した。

「シスター・アガサは、」と、ミス・ペニーが言っているのを私は聞いた。「祈り、熱心に勧め、教えたのよ。彼女は、ほんの一瞬でも手があくと、あの若者の病室に走って行って、『お祈りがどれだけ大切か、あなたにはお分かりになるかしら？』と尋ね、彼が答える前に、きちんとして熱心なお祈りが、いかに効果があり役に立つかという事を彼にあれこれ話して聞かせたのよ。あるいは、『聖テレサのお話をしてもよろしいかしら？』とか、『聖ステパノのお話はどうかしら？ 最初のキリスト教殉教者ですよ、この方の事は御存知でしょう？』と言ったりしたのよ。クーノウは始めは聞きはしなかったでしょうね。彼にとっては、重大で絶望的な明日のことを考えると、そんな事とてつもなく見当違いだったし、無意味な邪魔でしかなかったのよ。刑務所に戻ることが、彼にとって差し迫った現実だったのね。そこで彼女はおもしろいおとぎ話を彼にしたのよ。するとある日突然、彼は耳を傾け悔恨と改宗の兆候を見せ始めたのよ。シスター・アガサは、自分の成功を他の修道女たちに知らせたの、すると一人の迷える羊を祝って大歓声が起こったのよ。メルボメネは、今までそんなに幸せだったことはなかったのよ。そしてクーノウは大喜びしている彼女の顔を見て、どうして始めからこの事に気付かなかったんだろうと不思議がり、愚かだったなあと思ったに違いないわ。女は彼に夢中になってしまったの。彼には四日しか残っていなかったの——その四日間で彼は嵐のような激情のふたを開け、道を作り逃亡の計画を立てたのよ。でもどうして一週間前に取りかからなかったのかしら？ その時なら確かめることはできたでしょうけど、今はどうかしら？ 到底知りようがないわ。四日間というのは恐ろしく短いものね。」

「彼はどんな風にしたんだい？」と、私は尋ねた。ミス・ペニーが言葉を切ったからである。

「あなたなら分かるでしょう」と、彼女は答え、イヤリングを揺ってみせた。「私には分からないわ。誰にも分からないのよ、当事者二人とシスター・アガサの懺悔を聞いた司祭以外にはね。でも彼のした事を再現することならできるわ。あなたならどうする？ あなたは男性だし、色恋についてはお詳しいはずよ。」

「いや、お世辞だろう」と、私は答えた。「君は本当にそう思っているのかい？」私は腕をのびした。ミス・ペニーは馬のように笑った。「いや、でも問題だ。これは特別なんだ。相手は修道女、場所は病院、恋のチャンスは皆無。丁度いい雰囲気——月夜とか音楽——もなし。だから、露骨なアタックは必ず失敗するだろうね。色男の大胆な度胸という最大の武器もここでは何の役にも立たないんだ。」

「その通り」と、ミス・ペニーは言った。「でも他の方法があるはずよ。同情と母性本能に訴えるという手段よ。崇高なもの、即ち魂に訴えるというやり方よ。クーノウはこの手を使ったに違いないわ。そうは思わない？ 改宗するように思わせ、彼女と共に祈り、同時に彼女の同情心に訴え、刑務所に戻るくらいなら死んだ方がましだとでも威かしたんでしょね。本当に真面目な調子でね。あなたならこうゆう事簡単にしかも、はっきり書きあらわせるでしょうね。でも私にとっては、うんざりする様な事だわ。だから私は小説は書かないのよ。で、この話のポイントは一体何なのかしら？ それにあなた方物書きが特に悲劇を書く時大切だと思っている方法は、何なの。全く全て奇妙なことだわ。とても奇妙よ。」

私は何も言わなかった。ミス・ペニーは声の調子を変え話を続けた。

「さて」と、彼女は言った。「たとえどんな手段であろうと、とにかく成功したのよ。愛が道を開いたのよ。クーノウが刑務所に連れ戻される前のある日の午後、二人のシスターが病院の門から出て前の広場を横切り、川の方へ狭い道を降りて行って橋の所で電車に乗り込んだのよ。そして郊外の目的地に着くまで電車からは降りなかったのよ。二人は本街道に沿って田舎の方へと、どんどん歩き始め、家が見えなくなると、一人が『ご覧』と言ったのよ。そして、手品師のような手つきで、どこからともなく赤い皮の財布を取り出したの。『どこから持ってきたの』と、もう一人がびっくりして目をみはって尋ねたのよ。かわいそうなメルポメネの心には、預言者エリシャや、ワタリガラス、寡婦のつば、聖戦祿の記憶などが浮かんだに違いないわ。『電車の中で俺の隣りに座っていた年寄りが、バックを開けたままにしていたんだよ。簡単なことじゃないか。』『クーノウ、まさか盗んだんじゃないでしょうね。』クーノウはひどく毒づいたのよ。彼は財布を開けたわ。『たった六十マルクか。絹と毛皮に身を包んだ、あの婆さんがたった六十マルクしか持っていないなんて、誰が思うかい？ それに俺は逃げるのに最低千マルクはいるんだ。』二人の会話の残りをおきまりのものに再現することは簡単よね。『たのむから黙ってくれ』と、クーノウはびっくりしても尚説教しているメルポメネの口を塞いだのよ。二人は黙ってとぼとぼと歩くのよ。たった六十マルクしかない。それではどうすることもできない。もし何か売るものがあれば——宝石とか金や銀か何かが。こういったものを売る場所を彼は知っているのよ。何マルクか足らない為に、彼はまた捕まえられるのかしらね？ メルポメネも考えているのよ。悪事が成されて、結局善良なものがそれに従ったのかもしれないわ。彼女は、同僚のシスター・メアリーの修道服を彼女が仕事が終わって寝ている時、盗んでしまったんじゃないかしら。誓いを破って修道院を逃げ出したんじゃないかしら。しかも彼女は、自分が正しい事をしていると確信していたのよ！ 神秘の力が、それを認めてくれたと、彼女は確信していたのよ。そして、今、赤い財布があったの。魂を救う事と比較してみると、この赤い財布は一体何なのかしら——結局、クーノウの魂を救う以外、彼

女は一体何をしたのかしら？」大袈裟な質問をしている討論者の様な声と様子で、ミス・ペニーは、テーブルの上をびしゃりとたたいた。「ああ、神様、こんな話、何てくだらないのかしら！」と、彼女は叫んだ。「できるだけ早く、こんな陰気な話終わりにしましょうよ。ねえ、この頃までには、夜になっていたのよ——寒い十一月の夕闇などを想像してみて。でも自然描写はあなたにおまかせするわ。クーノウは道端の、溝に入って洋服を脱ぐのよ。危険に際しては、ズボンをはいていた方が、動きやすいと思ったんでしょうね。二人は何マイルも歩いて行くのよ。夕方遅く二人は本街道を出て森の方に向かって畑を通過して歩いていくの。森の端の所で二人は、羊の産期中、羊飼いたちが眠る、小屋を見つけるの。」

「本物の『羊飼いの家』だ。」

「その通り」と、ミス・ペニーは言って暗唱し始めた。

『もし君の心が、命の大切さを嘆き悲しむなら、
傷ついた鷺のように、もがき苦しそうに歩け……』

どう続くんだったかしら。子供の頃とっても好きだったんだけど。

『入口には煙がたちこめ、寝室は大きく暗い、
その中に花があり、私たちは物陰に見つける、
静かなベッドを』

私は、こんな風に続けられたわ。

「続けてくれ」と、私は言った。

「駄目、駄目。もうこんな嫌な話止めるわ。クーノウは小屋のドアについている南京錠をこわし二人は中に入ったの。その小さな小屋の中で何が起きたと思う？」ミス・ペニーは私の方にかがみこんだ。うさぎのような目がキラキラ輝き、長いイヤリングが揺れかすかな音がした。「ぎらぎらする欲望の魂を前にした時の三十歳で処女の修道女の気持ちを考えてみてよ。若い男のどこにでもあるような残忍さを考えてみてよ。まあ、ここから、また何ページ分かの話が出き上がるわね——完全な闇の世界、わらの匂い、二人の声、押し殺した叫び声、二人の動き！ 狭い閉じ込められた場所での迸るような感情は、あたりを揺さぶるくらい強烈でしょうね。どう、この場面は、どこにでもありそうな小説の一場面ね。朝になって」と、ミス・ペニーは、ちょっと黙ってまた話を続けた。「仕事に行く途中だった二人の木こりが、その小屋のドアが開いているのに気づいたのよ。彼らはそっと斧を持って、もし必要なら、それで一撃する準備をしてその小屋に近づいたの。のぞ

いて見ると、わらに顔をうつぶせにした黒い洋服を着た女が見えたのよ。死んでいるのか？ いや、彼女は身動きしてうめき声をあげたのよ。『どうしたんだい？』涙ですっかり汚れて泣きはらした顔で彼らの方を見たのよ。『おい、どうしたんだ？』——『行ってしまったのよ！』何て奇妙で不明瞭な言葉なの。木こりたちは、お互い顔を見合わせるの。彼女は何と言っているのかしら。彼女は外国人なのね。『おい、どうしたんだ？』二人はまた繰り返すのよ。その女は突然激しく泣き始めるの。『行ってしまった。行ってしまった！ 彼が行ってしまったのよ』と、彼女は訳のわからない感じでおんおん泣いているのよ。『行ってしまった。この女はそう言ってるぞ。誰が行ってしまったんだい？』——『私をおいて行ってしまったのよ』——『何だって？』——『私をおいていったのよ……』——『何だって？ もう少しはっきり言ってくれよ。』——『言えないのよ』と、彼女は泣き叫ぶのよ。『私の歯をもっていったのよ。』——『おまえの何だって？』——『歯よ』——そして、そのかん高い声は絶叫になり、わらの中に泣きながらくずれ込むのよ。木こりたちはお互いに意味ありげに顔をみ合わせうなずくの。二人の内の一人が自分の顔にその太い黄色つめをした人指し指をもっていくのよ。』

ミス・ペニーは、腕時計を見た。

「おやまあ」と、彼女は言った。「もう三時半だわ。行かなくちゃ。お葬式の事忘れないでね」と、彼女はコートをはおりながらつけ加えた。「蠟燭、礼拝堂の通路にある真黒い棺、白い頭巾をつけた修道女たち、陰気な歌声、そして、自分は死んでしまったのだろうか、それとも生きているのだろうか、あるいは地獄にいるのだろうか、不思議な顔をしている歯のない老人のように、しわくちやのかわいそうな女^{ひと}の事を忘れないでね。じゃ、さようなら。」

(注)

- (1) Aldous Huxley, "Nuns at Luncheon" from *The Gioconda Smile and Other Stories* (London: Triad Panther, 1984), p.p. 185-202
- (2) mixed grill: ミックス・グリル (燗り焼きにした子羊, ソーセージ, レバーなどの肉類と、トマト, マッシュルームなどを取り合わせて皿に盛った料理)。
- (3)(4) 共に女流ジャーナリストとしてのミス・ペニーが新聞を発表した記事のタイトルである。この物語は、第一次世界大戦直後のことである。
- (5) hanging beer-garden: つりビヤガーデン (崖の中腹などに造って空中に掛かった様にみせた庭)。
- (6) Sisters of Charity: 慈善婦人会修道女 (1634年, St. Vincent de Paul が創立したカトリック系の修道会の会員。主として、病人の看護にあたった。)
- (7) The Fathers of the Church: 教父(キリスト教初期の教会史, 教理, 戒律の源となる著作をしたキリスト教初期の人々)。
- (8) Immaculate Conception: 無原罪懐胎説(聖母マリアは、その母の胎内にみごもった瞬間から原罪を免れていたこと)。

Aldous Huxley 著「昼食の時、聞いた修道女の話」(翻訳)

- (9) Lemuria: レムリア (昔, 存在したと考えられた仮想大陸, 今のインド洋を占めていたと言われている。)
- (10) Herder: Johann Goltfried von Herder (1744~1803, ドイツの哲学者)。
- (11) Porridge: ポリッジ (水または牛乳で煮たオートミル。イギリスの典型的朝食のメニューである。)
- (12) 1914: 第一次世界大戦勃発の年を指す。
- (13) St. Theresa: 聖テレサ (1515~1582, スペインのカルメン会の修道女)。
- (14) *The Imitation of Christ*: 「キリストに倣いて」(Thomas à Kempis の作と言われている十五世紀の信仰の書)。
- (15) Prevost: Marcel Prevost (1862~1941, フランスの小説家, *Les Demi vierges* の著がある))
- (16) St. Stephen: 聖ステファノ (?~C.35, 最初のキリスト教殉教者)。